

# 梅嶺大枝の研究

——本学「選仏場」扁額の筆者——

田 島 柏 堂

## 序

本年（一九八四）は、愛知学院が創立されてから百八年目に該当している。さきに創立百周年の際、不肖私（編集主任）ども編集委員によって編纂した『愛知学院百年史』には、「明治九年（一八七六）五月、曹洞宗専門学校規定の宗達により、名古屋市門前町、大光院に曹洞宗専門支校が開設された。これが愛知学院の前身であり、今を去ること一〇〇年前のことであった。」<sup>(1)</sup>と記してある。さらに「専門支校の教場は大光院の禅堂約三〇坪であったが、昭和十二年（一九三七）赤門通りの拡張により取り払うことになり、覚王山日泰寺に移転された。のち改造され当時のものは「選仏場」の挙額のみが、その歴史を物語るものである。

梅嶺大枝の研究（田島）

挙額の表面に梅嶺と刻印が書かれているので、安永八年（一七七九）十七世梅嶺大枝師の建立と思われる。この額が愛知学院の草創を記念する唯一の遺物である。<sup>(2)</sup>と見えてゐる。（写真参照）

たまたま本学創立百四年目に当る昭和五十五年四月に、大学キャンパスの一隅に坐禅堂が竣工し、この禅堂前門の外側入口上方に、扁額を掲げることになった。よって前述の本学院草創を記念する唯一の遺物、梅嶺大枝筆になる「選仏場」の額を模刻して掲げることができた。しかるに、本学と関係深い扁額の筆者梅嶺大枝なる人物について知る人は、極めて少ない。そこで梅嶺その人について、諸種の資料収集や実地踏査を行なった結果、一応纏めることができたので、ここで叙述したいと思う。

一行歴

梅嶺は、諱を大枝といい、今からおよそ二百五十年前、享保十六年(一七三二)京都に生まれ、俗姓不詳。元文五年(一七四〇)十歳のとき、丹波瑞雲山龍



梅嶺大枝の扁額

福寺(三世・京都府船井郡瑞穂町) 万里虎関(？・一七七七・無得良悟) 断崖独橋の法嗣(3) について出家得度し、のち虎関の法嗣、大鈍心庭(名古屋市中切町白馬山乗円寺二世・愛知県愛知郡日進町久遠山靈鷲院七世(4) に参禅すること約三年、ついで美濃補陀山全超寺(岐阜市野一色) 無聞寂端(無得良悟の法嗣(5) 尾張鳳凰山新豊寺(開山・名古屋市昭和区南山町、明治初年廃寺) 頑極官慶(一六八三―一七六七・黙子素淵の法嗣(6) 加賀東香山大乗寺(三十九世・金沢市長坂町) 一入覚門(一六八八―一七六七・

智燈照玄の法嗣(7) 等、諸方の宗匠に歴参した。その後、尾張三宝山観音寺(名古屋市区見玉町) にて首座となった。このとき萊翁黙仙(生寂年不詳・頑極官慶の法嗣、愛知県西春日井郡春日村、松雲山仏音寺二世(中興) ) は、次のごとき賀偈を送っている。

賀<sup>ス</sup>大枝首座<sup>ヲ</sup> 時<sup>ニ</sup>枝首座贈<sup>テ</sup>偈<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>祝<sup>ニ</sup>余<sup>カ</sup>於<sup>テ</sup> 建<sup>テ</sup>法幢<sup>ヲ</sup>次<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>韻<sup>ヲ</sup>賀<sup>ニ</sup>公<sup>ノ</sup>之<sup>カ</sup>立<sup>ニ</sup>僧<sup>ヲ</sup> 叢<sup>ニ</sup>林<sup>ノ</sup>種<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>由<sup>テ</sup>來<sup>ニ</sup>聽<sup>ク</sup>、蓋<sup>ニ</sup>覆<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>揚<sup>ニ</sup>譽<sup>ノ</sup>聲<sup>ヲ</sup>、好<sup>ク</sup>個<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>枝<sup>ノ</sup>生<sup>ニ</sup>實<sup>ヲ</sup>地<sup>ニ</sup>、葉<sup>ノ</sup>陰<sup>ヲ</sup>繁<sup>ニ</sup>茂<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>央<sup>ヲ</sup>々、

〔萊翁黙仙語録(8)〕

明和三年(一七六六・三十七歳)、再び大鈍心庭に参じてその法を嗣いだ。同年九月、美濃真如山本覚寺(岐阜県羽島市竹鼻町) に首先住職(八世) し、本堂を再建している(写真参照)。翌四年(三十八歳) 二月には、総持寺に瑞世した。さらに尾張泰崇山永安寺(名古屋市中区東桜) 第十三代の住持を董し、開堂結制の式典を挙行した。このときの信濃神龍山大沢寺(長野県大町市堀六日町) 千丈実巖(一七二二―一八〇二) の開堂道旧疏が『幽谷余韻抄』(卷上) に見えている。



本覺寺

請永安大枝和尚開堂道舊疏

頻伽出殻、聲壓衆鳥而高、梅檀吐芽、氣奪群芳而秀、已殊燕雀、豈比芥蕭、堪咲擊千萬里之鯤鵬、可欺滿于九畹之蘭蕙、方此鷓鴣翱翔之日、奈何叢林凋零之秋、非得紫雲丹霄好羽儀、爭圓一華五葉舊公案、恭惟永安堂頭大和尚、齟齬穎悟、操履謹嚴、曾透虎豹之關、爲的孫、不假鷄鳴之力、數結龍象之會、行正令、專破孤疑之禪、文彩縱橫、正偏回互、分賓主於鳴下、辨玉石於機前、住永安不愧永安、怒罵嬉笑皆是輔教、即此用耶離此用、捏聚放開莫非施門、江西湖南昔遊、暮雲春樹近況、竊感各夢同床之雅、緬想恬退葆光之儀、因激勉以蕪辭、請垂炤察、芹悃、適會皇天升平之運、獨當禪風恢復之仁、伏願、振獅子吼一聲、祝鳳凰臺萬歲、

當時、尾張新豐寺の住持(三世・明和五年八七六八)より同八年八七七一秋まで住山す)であった玄透即中(一七二九—一八〇七)も、梅嶺に祝偈を呈上している。

大枝禪師新董永安、末經數旬結制安居衆、

一偈以賀盛事、

既聞道普遍叢林、矧亦喬副衆心法、

梅嶺大枝の研究(田島)

法席新開凡聖會、不<sub>レ</sub>妨天下玄鐵鍼、

(『空華庵録』<sup>(12)</sup>)

因みに、玄透の新豊寺住山期間より考察して、梅嶺が本覺寺に住したのは、恐らく明和三年九月より同八年(一七七二)の数年間ではなかったかと思う。また永安寺に住したのは、それより安永七年頃までの七、八年間と推考される。

安永八年(一七七九・四十九歳)には、興国山大光院(名古屋市中区大須)に進任(十七世)し、新に禅堂を建立した。ついで、「選仏場」の扁額を大書して篆刻し、これを禅堂前門入口の上に掲げた。続いて庫裡、山門を再建し、あるいは大鐘を铸造し、『大般若経』(六百卷)等の什具を充足するなど、伽藍を復興し什具を完備した。さらに寺格を随意会地(三年に一会の結制を修行しうる資格の寺院)となし、叢林としての規矩を整えると共に清規を厳行した。よって尾張第九代の藩主徳川宗睦より時服を賞賜され、また臥山静高(定保慧胤の法嗣・萬松寺二十四世・明叟山安清院法地開山・碓屋山宋吉寺二世・仙境山松岩寺二世)が同院に住し(十九世)た際、「当院中興」の名を付与している。<sup>(13)</sup>

この頃、近江曹沢寺(十八世・滋賀県高島郡今津町)量外寛江(生寂年不詳)は、梅嶺の業績をたたえ、一偈を呈露している。

呈<sub>ニ</sub>尾之大光院大枝和尚<sub>一</sub>

道風名譽滿<sub>ニ</sub>禪林<sub>一</sub>、握<sub>レ</sub>手論心爲<sub>ニ</sub>舊音<sub>一</sub>、揮筆詞章飛<sub>ニ</sub>白玉<sub>一</sub>、鉗鎚爐裏鍊<sub>ニ</sub>黄金<sub>一</sub>、思<sub>レ</sub>師杜宇月明冷、移<sub>レ</sub>案江山夜色深、七里灘頭秋渡日、預期東海共<sub>ニ</sub>浮沈<sub>一</sub>、

(『量外寛江語録』<sup>(14)</sup>)

天明六年(一七八六)四月、臥山静高が尾張金剛山長栄寺(名古屋市中区橋)第十一世に晋任し、結制開堂の式典を行なった際、梅嶺は、左のごとき道盟疏を撰し捧読している。

干竝

長榮堂頭高公和尚大禪師、今夏結制爲<sub>レ</sub>國開堂諸山朝揖、緇素頌葵、眞子也道盟隣好恭撰<sub>ニ</sub>短疏<sub>一</sub>以慶讚<sub>スルモノナリ</sub>者也、竊以、雷澤千年識梭、不<sub>レ</sub>乘<sub>ニ</sub>風雲<sub>一</sub>而奚見<sub>ニ</sub>化躍<sub>一</sub>、柯亭一枝管任、匪<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>知音<sub>一</sub>而争<sub>ニ</sub>発<sub>ニ</sub>希聲<sub>一</sub>、鹿射<sub>ニ</sub>干此<sub>ニ</sub>香<sub>ニ</sub>千彼<sub>ニ</sub>豈<sub>ニ</sub>同<sub>ニ</sub>魯人<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>敬東家丘<sub>ニ</sub>乎哉<sub>一</sub>、蓋崑河九曲<sub>ニ</sub>而到<sub>ニ</sub>海陽谷三浴<sub>一</sub>而升<sub>ニ</sub>天者歟<sub>一</sub>、恭惟<sub>ニ</sub>癡絶曹孫<sub>一</sub>、勅住永平見董金剛静高大和尚、定翁的<sub>ニ</sub>子<sub>一</sub>、虎策親持<sub>ニ</sub>遍扣<sub>ニ</sub>諸

方門戸、龍孟重負、獨壓三千峰精籃、觀其威嚴、皎苦明星之出、見其機要、淵乎古井之深、同氣隣燭、可分、桃李爲蹊、他方化佛禮讚、錦上鋪花、模育王塔、長者言顯、鷲子非、爲牀座、來開衆香筵、居士今有淨名、鼎新丈室、去嘉會再儼然、時緣既成熟、伏願、擊蓬萊、作鐵笛、唱、先師未了、雅曲於金剛山頭、拈須彌、爲瓣香、祝、當今無疆、聖年於燈王座上、若然、扶桑披雲、火陽盈目、大唐打鼓、新羅作舞、維時天明萬年、龍舍丙午孟夏穀旦、興國山見住大枝欽和南拜疏

〔長榮靜高開堂錄〕<sup>(15)</sup>

寛政四年（一七九二・六十二歳）冬、さらに龜岳山萬松寺（名古屋市中区大須）二十二世を董し、住山することおよそ三年、その間、洞雲山正福寺（法地開山・名古屋市中区新栄）を再建して法地となし、その他、萬松寺の末寺、玉龍山陽岳寺（法地開山・名古屋市西区大野木）靈岳院（のち廃寺となる）の両寺も法地に改めた。同六年（一七九四）春には授戒会を開筵した。戒弟約三百五十余員の多きを数え、盛大な法会が挙行された。<sup>(16)</sup>もって師の徳風の高きことが窺い知られる。梅嶺は、惜しくもこの年六月二十

### 梅嶺大枝の研究（田島）

六日、六十四歳を一期として示寂した。遺偈に「六十四年、瞎証妄禪、末後一句、烏龜上天」とあり、遺骸は正福寺に葬り、塔を不変と命名した。なお法嗣には盛峯興賢（正福寺九世）がある。<sup>(17)</sup>

因みに、梅嶺の洒水忌には、全苗月湛（一七二八—一八〇三・燈外素継の法嗣）が導師を勤め、そのときの法語が、『洞水和尚語録』巻七に見えている。

萬松大枝和尚三七日

劫外一枝落、地時、虚空出手強相支、<sup>(18)</sup>

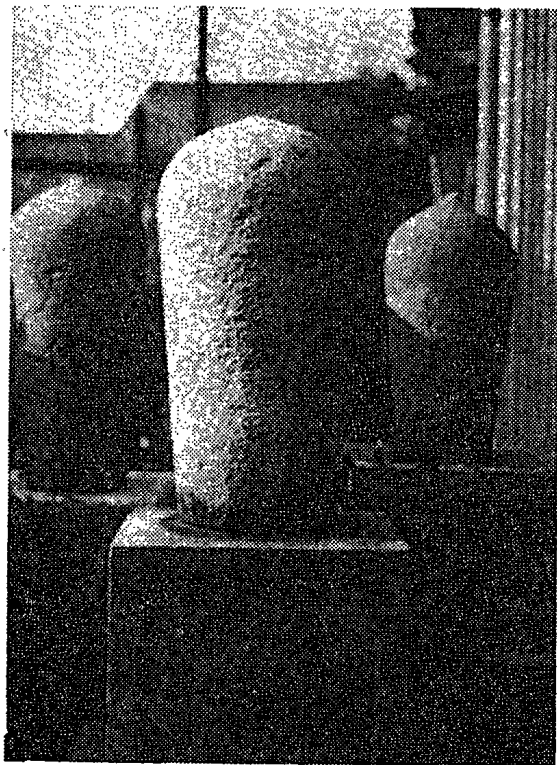
藤枯樹例龍吟起、上有靈松、帶露奇、

なお永安寺、正福寺等には、梅嶺の筆になる木額がそれぞれ存していたが、この度の戦災にて焼失したことを付記しておく。

### 結語

以上、梅嶺は、江戸中期すなわち十八世紀の中頃より末葉にかけて生存した当地方におけるすぐれた宗匠で、当時の錚錚たる禅匠たちに参禅すると共に厚誼を結び、かつ諸寺の伽藍を復興し、什具を整備して清規を厳行する等、行持綿密な宗師家であったことが知られる。

なお叙上、萊翁黙仙、玄透即中、千丈実巖、量外寛江等により、「既聞道誉扁ニ叢林」、「道風名誉滿ニ禅林」、「叢林種草由来聰、盖ニ覆人天ニ揚ニ誉声」、「気奪ニ群芳ニ而秀」、「鉗鎚爐裏鍊ニ黄金」、「韶齡穎悟、操履謹嚴」、「文彩縦横、正偏回互」、「揮筆詞章飛ニ白玉」などの語が見えているところよりして、梅嶺が早くより衆に秀で、詩偈や書を能くし、厳格な風格の人柄であったことが知られ、当時の宗門における善知識たちより、いかに高く評価されていたかが知られる。もって梅嶺を中心として各宗匠たちとの交



梅嶺の卵塔 (本覺寺)

渉、またその行動を通じて寺院の様相等、当時の宗門教団の動向が窺い知られる。

注

- (1) 『愛知学院百年史』五三頁。
- (2) 『愛知学院百年史』五四頁。
- (3) 萬里虚関(安永六年六月五日寂)は、のち山口県長門市深川、東廬山大寧寺三十五世・愛知県永安寺十一世・同靈鷲院六世・同名古屋市中区東桜、朝日山照運寺・同乗円寺各開山となる。『曹洞宗全書』大系譜一、六四頁。因みに萬里虎関は、頑翁拽石(一六九二—一七四二)とは法兄弟で、『靈鷲開山頑翁石和尚行業記』(村上素道氏蔵・『曹洞宗全書』史伝下、四八一—四八六頁)一巻の著がある。
- (4) 大鈍心庭は、『曹洞宗全書』大系譜一、六四頁。なお大鈍は靈鷲院の位牌によれば、宝曆十一年(一七六一)十二月七日示寂しており、同院および乗円寺にそれぞれ墓がある。
- (5) 無聞寂端は、のち山口大寧寺三十二世・島根瑞巖寺三世・福井龍沢寺十八世に歴任す(『曹洞宗全書』大系譜一、五八・七二頁)。
- (6) 拙稿「新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究」(愛

知学院大学『禅研究所紀要』六・七合併号、一九一四一頁。

(7) 『大乘聯芳志』(『曹洞宗全書』史伝上、五八四頁)、館残翁氏『加賀大乘寺史』二七三頁。

(8) 拙稿『萊翁黙仙語録』・『長栄静高開堂録』について(愛知学院大学『禅研究所紀要』十号、二一三〇頁・八付)『萊翁黙仙語録』(福井県 永平寺蔵)一丁表裏。

(9) 梅嶺は、『曹洞宗全書』大系譜一(六四頁)によれば「愛知萬松寺二十二世・同永安寺十三世・同正福寺・同陽岳寺各開山」とあり、本覚寺・大光院に住したことは記していない。しかるに「法地開山梅嶺伝」(『名古屋市史』社寺編「正福寺」五九四頁)には、「九月初めて美濃本覚寺に住し、本堂を再建す」と見えておる。幸い、本学商学部の大橋靖雄先生が、本覚寺住持(二十一世)であるので、調査して頂いた結果、同寺八世の住持で、その卵塔(写真参照)も存することが判明した。大光院については「法地開山梅嶺伝」(同上)に「安永八年進んで大光院に移り……」、また『名古屋市史』社寺編「大光院」(六二二頁)には「安永八年十七世梅嶺大枝の住するに及び……」とあることによって知られる。

(10) 吉川彰準師「文透禪師御伝記」(『永平寺五十代文透禪師遺墨集』一六二頁)、拙稿「新資料による頑極官慶と尾張

新豊寺の研究」(愛知学院大学『禅研究所紀要』六・七合併号、三一—三二頁)。

(11) 『幽谷餘韻抄』卷上(『続曹洞宗全書』語録三、一九〇頁)。

(12) 『空華庵録』(『続曹洞宗全書』語録三、二五七頁)。

(13) 『名古屋市史』社寺編「大光院」六二二頁、「法地開山梅嶺伝」(『名古屋市史』社寺編「正福寺」五九四頁)。

(14) 『量外寛江語録』(『続曹洞宗全書』語録三、二三八頁)。

(15) 拙稿『萊翁黙仙語録』・『長栄静高開堂録』について(三〇—三二頁)八付『長栄静高開堂録』(福井県 松源寺蔵)一丁表—四丁裏。

(16) 靈岳院は、『延享度曹洞宗寺院本末牒』(二〇一頁)の「萬松寺末」のなかに「一除地 尾張国愛智郡名護屋 靈岳院」と見えている。

(17) 『名古屋市史』社寺編「萬松寺」六〇六頁、「法地開山梅嶺伝」(『名古屋市史』社寺編「正福寺」五九三—五九四頁)、『曹洞宗全書』大系譜一、六四頁。

(18) 『洞水和尚語録』卷七(『曹洞宗全書』語録五、二八七頁)。因みに、全苗月湛は、諱を月湛、字は全苗、別号を洞水といった。岐阜雲龍寺二十三世・富山光嚴寺二十六世・同大淵寺二十二世・同高源寺に歴住す。五位研究の著名人、多数の著書のうち『五位願訳元字脚』は有名である。

梅嶺大枝の研究（田島）

【付記】

この研究調査に対して、種々ご協力を賜った関係ご寺院各師に対して、甚深の謝意を表する次第である。